

## お知らせ



明けましておめでとうございます。

この休み中は大きな事故もなく、元気に3学期始業式を迎えることができました。

始業式では次のような話をしました。

まず、岡山県の高校生チームが全国大会で大活躍したことです。倉敷高校が高校駅伝で優勝したこと。就実高校も全国のパレーボール大会で決勝では敗れましたが見事準優勝したことです。どちらのチームもチームワークを大切にしながら死にものぐるいで日々努力を重ねていたこと。

次に、箱根駅伝では、青山学院大学が見事に3連覇を成し遂げました。大会前から優勢が伝えられていましたが、もし負けるとしたら、「気の緩み」「インフルエンザ」「ノロウイルス」だと言われていました。3年生も受験に負けるとしたらこの三つの中のどれかが該当する可能性が多いので十分に健康と気持ちの持ち方には注意すること。

最後に、県道に散乱していた古紙を一人で回収した埼玉県の高校1年生が、見て見ぬふりをして通り過ぎる自分を受け入れられず、後先のことを考えずに一心不乱に集めた行動は、周囲の心を揺り動かしたこと。

自転車で通学していて県道を通りがかった際、新聞紙や折り込みチラシが半径約3メートルにかけて大量に散乱しているのを目の当たりにした。一度はそのまま通り過ぎたものの、「何もしていない自分に辛くなった」と戻って来た。

当初は古紙を自転車の前かごに積んで自宅に持ち帰ろうとしたが、収まり切れない。約500メートル離れたコンビニエンスストアへ行き、ゴミ袋を買って戻り、再び拾い集めた。現場は交通量の激しい通り。高校生は青信号になるたびにひたすら拾い続けた。

午後5時20分ごろ、警察署に「女子高生が落とした荷物を一人で拾っている。かわいそうだから助けてほしい」と連絡が入った。署員が駆け付けると、すでにごみ袋3袋分、計10キロの古紙が回収されていた。

高校ではバスケット部に所属していて、普段から学校周辺のごみ拾いなど美化活動をしてから朝の練習に取り組んでおり、「学校でもやっているのだから当たり前と思って拾いました」と振り返った。

皆さんも、この生徒のように地域でできることがあれば自ら見つけて積極的に実践してほしい。

### 今年も元気なあいさつ運動から

1月11日(水)は今年に入っての第1回目の「あいさつ運動」の日でした。熊山駅前、松木交差点、沢原交差点、熊山インター入口の計4カ所で実施しました。この運動には、生徒会からの呼びかけで地域の方も早朝から参加してくださり大きな声で生徒とともに声かけをしてくださいました。

次回は2月8日(水)午前7時20分から実施いたします。ご都合がつけば保護者の方も参加してください。



## 元プロ野球選手とトークセッション

講師は、 福嶋 久晃先生 元プロ野球選手（捕手・内野手）・コーチ・解説者。

### ～簡単に紹介～

1966年ドラフト外で大洋ホエールズに入団。1975年から6年連続で2桁本塁打をマーク  
1978年4月5日の広島戦では横浜スタジアムこけら落としのチーム第1号本塁打を北別府学から放ち、  
1980年4月5日には開幕戦の巨人戦（横浜）で江川卓からサヨナラヒットを打った。現在は、  
関西高等学校でコーチを務めている。

はじめに、生徒たちへのメッセージとして、長年キャッチャーをしていて考えていたことを話されました。

キャッチャーをして大切なことは、常に「目配り」「気配り」「思いやり」を大切にしてサインを出すこと。そして、先を読むこと。負ける話をしない。普段練習したことを話す。試合の前は勝ち負けを口にしない。そのようなことを話されました。

次に、トークセッションでは、「仲間づくり」「チームワーク」などをテーマとして代表の生徒が緊張しながら質問をすると、楽しそうに次のようなことを話されました。

生徒「チームをまとめるにはどうしたらいいですか。」

先生「あなたが一番元気になったらいい。毎朝、校門で挨拶をしたらどうか。」

「あいさつができない人は、プロでやっていけない。」

生徒「プレッシャーに勝つためにはどうすればいいのですか」

先生「普段から準備をしていなければならない。」「人と同じことをしていたらとれない。人とは違う何かをしていなければならない。」



## 校長先生が2年生に道德の授業

筋ジストロフィを患った純君の生き方から学ぶ授業でした。病気と闘いながら毎日笑顔で中学校に通う純君の姿がまわりの人々の心に変化を生みだしました。「純君のために自分ができること」を通じて生命の尊さを考える機会となりました。

### ※生徒の感想より

- ・もし、自分が病気だったら、どうやって学校生活を送っていいかわからないし、友達や学校のみんなが話をしてくれなかったらすごく大変だと思う。
- ・校長先生も交換日記など、さまざまな工夫をして、心の支えになっていてすごいと思った。
- ・「助ける」という言葉が一番心に残っている。今後、病気だけでなく困っている人や苦勞している人を積極的に助けたい。
- ・今日は、とても感動するビデオを見せてくださってありがとうございます。

多数の生徒が涙を浮かべる感動的な授業となりました。